

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

## なぜアーサー・グリフィスは蜂起しなかったのか：シン・フェイン党の創設者

鈴木, 良平

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

98

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

1996-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004606>

# なぜアーサー・グリフィスは蜂起しなかったのか

—シン・フェイン党の創設者—

鈴木良平

## 1. はじめに—スウィフトの『ドレイピア書簡』を中心に—

Sinn Fein 党といえば、現在では IRA（アイルランド共和国軍）の政治部門としての政党になっていて、髭ぶらの Gerry Adams 議長の活躍ぶりがテレビなどで目立つが、20 世紀初頭に Arthur Griffith らによって設立されたシン・フェイン党は、nationalist（民族主義者）の政党であって、国王を排斥し武力闘争も辞さない共和主義政党とは無縁な、穏健派の政党だったのである。宗主国イギリスはアイルランド中に多数の警官をはじめ、陸・海軍の基地をもっているのだから、武力闘争ではアイルランドに勝ち目はないと、シン・フェイン党は最初から武装蜂起を断念していた。その代わりに、19 世紀後半のオーストリア＝ハンガリー二重帝国中のハンガリー（議会はオーストリアとは別でも、共通の国王をもつ）のように、アイルランドも英国と共通の国王をいただきながら、国内的には独立国をめざす二重王政（Dual Monarchy）をグリフィスはめざしたのである。従って、共和国をめざして武力闘争も辞さない IRA、ないしはその前身の Volunteers（義勇軍）とは、水と油のごとく、相容れない別組織だったのである。それが長い歴史を経るうちに Sinn Fein がナショナリストの政党から共和主義者の政党へと変身し、現在では IRA の政治組織のごとき存在になったのであろう。

ところで、オーストリア＝ハンガリー二重帝国のことについては、後にやや詳しく触れるとして、歴史上他にも二重王国の例がないわけでもない。例えば、Sweden と Norway は別々の議会をもちながらスウェーデン国王を共通の国王としていただいていた<sup>(1)</sup>。（実質的にはスウェーデンによるノルウェイの併合だが、日本の朝鮮や台湾の併合、支配は、相手国に議会の存在も認めな

かったのだから、完全な乗っ取り、植民地化であろう。)

アイルランドにもグリフィス以前に二重王政を唱える者が何人かいた。19世紀の Daniel O'Connell, Thomas Davis, Charles Parnell などの名前があげられている。(I-251) しかし、一番古いのは『ガリバー旅行記』で名高い、18世紀前半の Jonathan Swift の *The Drapier's Letters* の中で言及らしい。(F-95) 以下、中野好夫氏の『スウィフト考』(岩波新書)中の「スウィフトと『ドレイピア書簡』」の項目から、延々と引用させていただくことになるのだが、『ドレイピア書簡』は「イギリス政府糾弾の匿名公開状で、彼(= M. B. Drapier (服地商) という署名の筆者)の正体に関して 300 ポンドの懸賞金が政府からかかったこと、また、それにもかかわらず、結果は政府の完敗に終わって、政策変更をよぎなくされたばかりでなく、他方スウィフトのほうは、一躍「アイルランド愛国者」として、まるで凱旋將軍のように迎えられた」(p.54) ののである。問題の発端は貨幣製造制度に関してなのだが、「もともと満を持していたスウィフトが、決然としてこの抗議行動に一役を買って出たときから、彼の真の意図は……むしろこのウッド銅貨問題をきっかけに使う、長年にわたる植民地的収奪の下、悲惨と困窮をかこちながら、諦めとでもいうか、長い無気力状態に沈みしてきたアイルランド国民の独立心を、一挙に奮起させようという魂胆であったことは、ほぼ明らかである。」(p.61) 「もっとも注目すべきものは……『第四書簡』である。(それは)『公開状—アイルランド全国民に訴える』と題されている。」(p.60)

その要点を中野氏の翻訳で示せば、「イングランドから来た人間、またわたしたちの中でも気の弱い人間などは、談ひとたび自由、財産のことに及ぶと、首を横に振って、なにしろアイルランドは従属国なのでね、などということを行います。まるでアイルランド国民というのは、イングランド国民と異なって、なにかまるで奴隷、隷属身分にでもあるかのような言い方なのです。……両国の法律をのこらず調べてみましたが、イングランドがアイルランドの従属国でないと同様に、アイルランドがイングランドの隷属国であるというような規定もまた、一つとして発見することはできませんでした。」(pp.75-76)

実は、中野氏訳には引用されていない、その次の部分に、二重王政が論じられているのだ。原文で示せば、

We have, indeed, obliged ourselves to have *the same King with them*; and consequently they are obliged to *have the same King*

*with us. For the Law was made by our own Parliament.*<sup>(2)</sup> (イタリックは原文)

中野氏も次のように書かれているが、「当時のアイルランドは、ロンドンのイギリス国王を共通の王としていただいていたが、要するに被征服、被収奪の植民地国であり、一応二院からなるアイルランド議会はあったが、実体はロンドンから送られる総督政治の下にあった。大体において、今次敗戦前までの日本に対する朝鮮のような事情にあったと思えば、いちばん手っ取り早いかと思う。」(p.56) という状態だったのである。

そして、公開状の筆者 M. B. Drapier は、「わたしは国王と自国の法律だけに従うのであって、英国人には従わない。もし英国人がわが国王に反乱をおこせば、わたしは武器をもって英国人と戦うであろう」と宣言するのである。さらに、「治療法はあなたがたの手の中にあるのです」と言って、「元気を出なさい」(refresh and continue that Spirit)<sup>(3)</sup> とアイルランド人を励まし、「神の法、自然の法、諸国民の法、またあなた方の祖国の法、そのいずれに照らしてみても、あなた方はイングランドの同胞と同様に、立派に自由の民であり、またそうでなければならぬのです。」(p.76) そして「こうして『第四書簡』は、公然たる民権宣言、民族独立の大文字(学?)であった。」と中野氏は締めくくるのである。

これは 1724 年スウィフト 57 歳の時の作品である。スウィフトはそれから 20 年ほど生きのびて、1745 年に 77 歳で死ぬ。それから更に 30 年ほどたって 1776 年にアメリカが英国から独立するための戦争が勃発する。だが、アイルランドの 18 世紀のプロテスタント支配層には、アイルランドが英国の植民地である、という意識は希薄だった。英国とアイルランドは同じ国王をいただく対等の間柄の国だ、と考えていたが故に、英国から独立しようとは夢にも思っていなかった。自国が植民地であるという自覚がなければ、植民地からの脱却・独立の運動などおこるはずもないのだ。

アイルランドが植民地であることに目覚めてゆくには、18 世紀末のフランス革命の影響をうけた Wolfe Tone を待たねばならなかったし、アイルランド人の実体が英国系プロテスタント支配層から、O'Connell、青年アイルランド党、更には Parnell を経て、ケルト系カトリック下層階級へと移るには、19 世紀の 100 年間という長い時間が必要だったのである。19 世紀末には Gaelic League が結成され、Irish Literary Renaissance などがおこる。そ

して、本稿の主人公 Arthur Griffith (1872-1922) も貧しい植字工、印刷工でありながら、文学青年として出発する。けれども彼は文学の枠には収まりきれずに、その枠をはみ出て、政治的人間として生きた男であった。

## 2. その前半生——親友との二人三脚——

Arthur Griffith は Dublin で 1871 年 3 月 31 日に二番目の子供として生まれた。アキレス腱の具合が悪く、歩行がすこし不自由であったらしい。(C-5) 彼の先祖は北アイルランドのプロテスタントの農家でありながら、祖父がカトリックの女性と結婚して相続権を失い、ダブリンに出てきて、印刷業にたずさわった。金を貯め、ダブリン南西の kildare 州に引っ越した。そこでグリフィスの父親は育った。父親は祖父同様にダブリンに出て来て、印刷屋になった。母親の家系は裕福で、音楽好きであった。それでグリフィスも音楽好きであった。しかし、子供の数がふえると、父親の生活は苦しくなり、一家は同じダブリンでも、より貧しい地区へと引っ越した。(C-3)

一般的に言って、印刷屋は本が好きで、多くの雑学的な知識をもっていた。収入も比較的よく、考え方や生活習慣においても、民主的であったと言われている。(C-4)

学齢期になると、グリフィスは近くの Christian Brother's School に通った。読書が好きで、記憶力がよく、文章を書く才能があった。(C-3) 15 歳で小学校を卒業すると、親子三代にわたって印刷業を選び、16 歳で小さな印刷屋の徒弟になった。やがて 17 歳の頃に仕事を終えた後に、同業の友人らと歩きながら、様々な書物やアイルランドの歴史などを語りあうようになった。(E-27) その集まりは部屋を借り、ろうそくの光で会合を開く Fireside Club となる。やがてそのクラブは他のグループと合併して The Leinstster Literary Society となった。(C-20) 彼らは青年アイルランド党の Thomas Davis (1814-45) や John Mitchel (1815-75) などの本を読んだ。(D-4) その文学協会でグリフィスは学校時代の一年後輩だが、有能な William Rooney と出会い、二人は親友となった。Rooney は鉄道会社につとめていた。グリフィスは彼を自分よりも優秀な人間として高く評価した。二人はいくつかのペンネームをつかって、新聞などに投稿した。(D-4)

グリフィスの少年時代は、土地問題の Michael Davitt や Home Rule (自

治)を求めた Charles Parnell の全盛期であったが、グリフィスが 19 歳になった 1890 年にアイルランド人の英雄パーネルは不倫事件で失脚し、翌年に死んだ。パーネルの失脚はアイルランド議会党の分裂をまねき、アイルランド人の解放をさらに遠のかせて民衆を失望させた。

1891 年にレンスター文学協会は退屈だとの理由で、The Celtic Literary Society に組織がえされ、Rooney が新たに会長になった。(E-28) 自国の言語と文学と文化遺産の探究・再発見がその課題であった<sup>(4)</sup>。毎週の文学会の会合には誰でも出席でき、たいてい偉大な文学者の伝記などが報告された。(B-3)

1893 年には Douglas Hyde によって Gaelic League が結成された。ゲリック同盟は、ゲリック(ケルト)的なものが、アイルランド人の長く眠りつづけた魂を覚醒させ、自意識と自尊心を生じさせ、そこから自己を頼みとする独立独行の精神が生まれる(A-7)と信じた。また、それはアングロ・サクソンのものを拒否して、ケルト的なものを重んじることであった。頹廢した、道徳心のないアングロ・サクソン文化に代わってケルト的なもの、更にはカトリック的なものの中に、真の文化を見出そうとする試みであった<sup>(5)</sup>。ケルト的なもの、それこそ英国の詩人、評論家の Mathew Arnold が気高く、非世俗的な生き方として賞賛したものであった。(C-27)

グリフィスは徒弟時代から *The Nation* 紙の植字工をしていたが、1892 年に徒弟修行を終えると、*Irish Independent* というパーネル系の新聞の原稿整理係になった。そして Rooney とグリフィスは連名で *Evening Herald* 紙に記事を連載するようになった。(C-26) そして、ケルト文学協会を介してグリフィスは上流階級出身でナショナリストで絶世の美女の Maude Gonne と知り合いになり、彼女の激しいナショナリズムに圧倒され、彼女のグループにも加った。(D-9) そのクラブの「長老格は John O'Leary で、彼は 16 歳のとき、フィニアズム運動の指導者 James Stephens に会い、爾来、熱心なフィニアズムの信奉者として、機関誌 *Irish People* の編集者となり、1865 年に逮捕され、牢獄生活 5 年の後パリで亡命生活を送っていたが、1885 年ようやく自由の身となってダブリンに戻って」<sup>(6)</sup> 来た。オーレアリは多くの詩人、文学者、芸術家などを周辺に集め、self-perfection が彼のナショナリズムの根本だった。(F-3) そしてモード・ゴンを介してグリフィスも Yeats, Hyde, 社会主義者の Connolly などと知り合いになった。それ以来グリフィ

スもオーレアリの影響をうけるようになった。(F-5)

1897年の暮れ(26歳の時)グリフィスは南アフリカの Transvaal 共和国へ行った。南アフリカには19世紀末にダイヤモンドと金の鉱床が発見されて以来、多くの英国人が入りこむようになっていた。グリフィスの南アフリカ行きの理由としては、アイルランドで印刷業が不況になっていたこと、彼の家系に結核病の人が多く、彼も肺の具合がよくなく、温かい所に転地する必要があったこと、があげられている。(C-32) また、在南アフリカの文学協会仲間の John MacBride から、来るようにと説得されたせいでもあり(H-145)、新しい展望を求めてでもあった(D-10)ことも確かであろう。

グリフィスは徒弟奉公を終えた職人の植字工としての、ダブリン植字工協会の移民証明書をもって南アフリカの Transvaal 共和国の首都 Pretoria へ行った。(C-33) 二年程の南アフリカ滞在中、グリフィスは三つのことをした。一つは週刊の英字新聞の編集を任されたことで、英国の植民地主義の実態を知るにつれ、反英、親ブーア人の立場をとったので次第に読者を失い、新聞はつぶれてしまった。(D-10) 次にウルフ・トーンらの United Irishmen の蜂起(1798年)の百年祭が近づいてきたので、ダブリンにいる Rooney と連絡をとり、現地にいる MacBride とともに百年祭を祝賀パレードで祝った。そして在留アイルランド人たちとともに親ブーア人の立場にたつ The Irish Society を結成した。(E-30) 更に Johannesburg に移ってからは鉱山で働いたりした。鉱石から金を取り出す仕事の監督をしたりして。(C-38)

The Irish Society のメンバーはアイルランド系アメリカ人が多かったが、1899年10月にブーア戦争が始まると、それは軍事組織に替わり、やがて John MacBride に率いられるようになった。(D-12) MacBride は IRB (アイルランド共和主義者同盟) に加入してから、アメリカを経て南アフリカに行き、鉱山の鉱石検査官として働いていた。(後に彼はモード・ゴンと結婚する。彼自身は1916年の復活祭蜂起に指揮官の一人として参加し、処刑されるが、彼の息子が Sean MacBride であり、IRA を経て Amnesty International を創設し、1977年にノーベル平和賞を受賞している。)

The Boer War が勃発する前に、ダブリンの友人 Rooney から二人して *United Irishman* という名称の週刊の新聞を創刊したいという要望をうけて、グリフィスは健康も回復したのでアイルランドに戻った。(I-148) 帰国すると Celtic Literary Society に再加入し、1899年4月に *The United*

*Irishman* を発刊した。それは Young Irelanders の指導者 Mitchel が 1847 年に発行した党の機関紙の紙名を借りたもので、Mitchel のスローガンを掲げていた。“We must have Ireland, ...Ireland for the Irish.”そして、創刊号には “We accept the Nationalism of '98, '48, and '67 as the true Nationalism and Grattan's cry, 'Live Ireland—Perish the Empire!' as the watchword of patriotism.”<sup>(7)</sup> という有名な宣言をのせた。'98 とは 1798 年のウルフ・トーンらの United Irishmen の蜂起、'48 とは 1848 年の Young Irelanders の蜂起、'67 とは 1867 年の Fenians (= IRB) の蜂起をさす。いずれも失敗したことは言うまでもない。'67 年の蜂起には後の 1916 年の復活祭蜂起と同様に「共和国の樹立」が宣言されている<sup>(8)</sup>。Grattan とはグリフィスが理想とする 1782 年憲法制定時に活躍したプロテスタントの政治家のことである。

「*The United Irishman* は単なる新聞ではなくて、忘れ去られたアイルランドの過去の栄光を国中の人々の心に伝えるためのチャンネルであり、自国のために戦って死んでいった人々に対する義務感を若い人々に思い出させるためのトランペットであった。誇りと威厳をもって頭を上げよ。自己と自国の救済はあなた方自身にかかっているのだ。」(A-6) そのことを毎週毎週、様々な歴史や文学や政治のエッセイなどでグリフィスらは説いた。

その新聞がウルフ・トーンらの United Irishman の蜂起百周年を意識して発刊されたことは、言うまでもない。この頃のグリフィスは伝統的な、反英武力闘争も辞さない共和主義者だったのだ。事実、新聞創刊直後に彼は IRB (=Irish Republican Brotherhood) に加入している。(H-145) 前回も書いたことだが、「アイルランド共和主義者同盟、すなわちフィニアン運動は、1858 年にダブリンとニューヨークで同時に始まった。ジェームズ・スティーヴンズ、ジョン・オーレアリ……といった勇ましい人たちの努力によるもので、そのほとんどが 1848 年の蜂起に関係のある人たちだった。……アイルランド・ナショナリテについてのトーマス・デーヴィスの原理を全面的に容認する一方、フィニアンは物理的な力によらないかぎりイギリスは独立をけって認めないだろうと確信した。」<sup>(9)</sup>

Rooney とグリフィスは様々なペンネームを使って、多くの記事を書き、またグリフィス自身が活字を拾ったりした。(E-32) 新聞発行の資金は、アイルランド系アメリカ人の団体やモード・ゴンなどから得た。グリフィスは週給

25 シリングをもらい、鉄道会社に勤めていた Rooney は無給だった。  
(G-13)

*United Irishman* 紙は政治だけでなく、文学や芸術、歴史などの様々な記事をのせ、多くの執筆者を集めた。しかし、グリフィスには「芸術のための芸術」という立場は理解できなかった。アイルランド人を英国の支配から解き放つために、アイルランド文学や芸術の復興を支持したにすぎなかった。例えば、1903年のことになるが、プロテスタント中産階級出身の劇作家 Synge が *In the Shadow of the Glen* という芝居を上演したことがあった。それは若い女と年老いた男の結婚をテーマにしていた。前回の『マイケル・コリンズ評伝』のコリンズの両親が、まさにその典型的なのだが、それは父親が死んで遺産が相続できて初めて長男だけが結婚できるという経済的貧困のせいなのだ。だが、シングの芝居では、若い妻が年老いた夫を嫌い、浮浪者と駆け落ちするというストーリーになっていた。それがナショナリストやカトリック教会当局を激怒させた。グリフィスも「アイルランドの女性が浮浪者と駆け落ちすることはありえない。それは嘘だ。」と激しく反発してシングを非難した。さらに、シングを弁護した Yeats との論争にまでなった。「cosmopolitan は決して偉大な芸術家を生むことはない」と言って。その論争の結果、モード・ゴンとダグラス・ハイドはイエーツの率いる「アイルランド演劇協会」を脱退した。ナショナリストの分裂であった。だが、1907年シングは『西国のプレイボーイ』を上演して、再びナショナリストたちを激怒させた。この時もグリフィスは再びシング批判の先頭に立った。(D-31)

話を元に戻すとして、1899年10月にブーア戦争が勃発すると、グリフィスはモード・ゴンや社会主義者の James Connolly らとともに、ケルト文学協会の事務所内に The Transvaal Committee をつくった。(D-12) それはブーア人に同情をよせることによって、アイルランドの青年が英軍に入隊することを阻止することを目的としていた。(H-147) また、ブーア人に救急車を贈ったりした。(B-8) しかし、徴兵反対運動が盛り上がると、組織内部の人間にスパイ説が出て、モード・ゴンがスパイとみなされた。(B-9) 高田久寿氏が書かれているグリフィスのエピソードはこのスパイ事件の時のことらしい。ダブリンの上流階級むけの雑誌の編集者がモード・ゴンのことを、元英国軍人の父親のおかげで英国から年金をもらいながら、英国を誹謗するのは「非良心的な行為だ」と非難した時に「グリフィスは怒ってフィガロ紙の事務所に

押しかけ、コリスをステッキで打ちのめした。彼のステッキはそのため折れてしまった。そのうえグリフィスは二週間の拘留の刑に処された。』<sup>(10)</sup> 冷静そうに見えるコリンズにもこのような激情が潜んでいたのだから、おもしろい。

その「トランスヴァール委員会」の会合のあとで、社会主義者の Connolly とグリフィスとの間に次のような論争がもち上がったことがあった。

コノリーが「アイルランドには 25000 人の英兵しかいないから、彼らを追い払うのは難しいことではない。そして、ダブリン市内の建物を占拠して、国中が自然発生的に蜂起することを信じて、共和国を宣言する」という計画をのべると、

グリフィスは「ピストルをもっているナショナリストはダブリンには 500 人もいない。アイルランドの革命は、組織と宣伝に準備をかけ、国内で蜂起する大陸型の革命とはちがって、国際的な状況や外国軍隊の駐留、アイルランド人が長い間武器を奪われていて、武器をうまく扱えないことなどを、考慮しなければならない。それに英海軍は艦砲射撃をしてくるだろう」と答えた。するとコノリーはあの有名になったセリフをのべるのだ。

「資本家政府は資本家の財産（注；ダブリンのこと）を決して破壊することはない。犬は共食いをしない」と。それでグリフィスは「英国政府はアイルランドの財産を大切に扱うことはないだろう」と答えた。（B-13, 14）結果的にみて、グリフィスの言うとおりで、コノリーは完全に見通しを誤っていた。

それに、IRB などの対英武力闘争派は、プーア戦争という「イギリスのピンチはアイルランドのチャンス」でありながら、実力不足、準備不足のせいで蜂起する機会を失ってしまった。（B-44）

1900 年 9 月、グリフィスは「トランスヴァール委員会」を中核に、いくつかの既存のナショナリストの団体を統合して、IRB の O'Leary を会長にして Cumann na Gaedheal（ゲール人協会）という組織をつくった。これが後の Sinn Fein の母胎となった。その新組織の目的は、アイルランド人の間に友愛の精神を培うことによって、独立の大義を押しすすめることにあった。（I-250）具体的には、(a) 自国の資源についての知識の普及と自国の産業の支持、(b) アイルランドの歴史、言語、音楽、芸術、の研究と教育、(c) 民族的なスポーツと民族的な性格の奨励、(d) アイルランドの英国化に通じるものには、すべて反対すること、であった。（H-150）「アイルランドを昔の主権ある独立の地位に回復させる際に、能力の限りをつくして援助する」ことを誓う者は誰

でも、その会員になれた。しかし、それは所詮ノンポリで、政治的な組織ではなかった。(F-18)

1901年5月に Rooney が27歳で急死した。結核だったらしい。彼は鉄道会社で働くほかに、週末には国中のいたる所で教えたり、話したり、書いたりしていて多忙だった。(C-60) そのショックでグリフィスは一週間入院したと言われている。(F-15) Rooney はグリフィスにとっては「もっとも偉大なアイルランド人」(F-4) であり、「英雄であり、鼓舞してくれる人であり、合作者」(B-46) であった。Rooney の死でグリフィスは独り立ちせざるをえなくなった。

### 3. ハンガリー政策と Sinn Fein の結成

1902年10月の Cumann na Gaedheal の第三回大会でグリフィスは、後に Hungarian Policy と呼ばれるようになった政策を発表した。それは、パーネル死後にアイルランド議会党の実権をにぎった Redmond の Home Rule (自治) を要求する議会主義と、IRB の伝統的な武装蜂起主義をとともに否定し、その中間にグリフィス独自の第三の道を模索しようとするものであった。

IRB に加入しているだけに、グリフィスは IRB の武力では英軍との戦いに勝てるはずがないことを熟知していた。(G-16) だから武力蜂起に代わって、消極的な抵抗を提唱した。また、Redmond 派の議会主義に対しては、abstention (ロンドンの英下院のボイコット) とダブリンに国民会議を創設することを代置した。(F-xvi)

グリフィスの目標は「主権国家としてのアイルランドの復活」(E-34) であった。1800年にアイルランドの議会で英国との併合を認めたことは「詐欺、無効」であった。だから現在の英下院にはアイルランドに関する法律をつくる権利はないし、アイルランドの議員が英下院に出席することによって英国の手助けをすることは誤りである。(E-34, 35) だから1861年にハンガリーの議員がオーストリア議会への出席を拒否して、ハンガリーに独自の国民議会を設置した故事に学んで、アイルランド人もダブリンに国民議会を設置することをグリフィスは訴えた。

ハンガリーの歴史をここで論じる余裕はないので、手近な百科事典でも見ていただくほかないが、ハンガリーはオーストリア帝国と共通の皇帝をいただき

ながら、オーストリアとは別の、独自の立法、行政、司法権をもつ主権国家であった。それぞれの議会で決められたことは、文書で送って報告するだけだった。外交、戦争、財政については、双方の議会から出た代表者が決めることになっていった。(E-34, 35)

だが、そのハンガリーにもかつては急進派が存在していて、1848年のウィーンの三月革命時に Kossuth を中心に共和主義者の独立革命がおこなわれたが、ロシア軍の干渉で失敗し、代わって君主制主義者の Deak が、オーストリアの議会をボイコットするなどの消極的な反抗路線に切り換えた。そして、二重王政の下でハンガリーの憲法を保証するというオーストリアの譲歩を引き出したのであった。(F-112, 113)

スウィフトの『ドレイピア書簡』を思い出してもらいたいが、アイルランドにもかつては議会があったのである。グリフィスはとりわけ 1782 年の Grattan 憲法を高く評価するのだが、それは憲法というよりは、英国とアイルランドの間での立法権の再分配みたいなもので、その憲法の二大欠陥は、(1)アイルランド議会で通過した法案に対して、英議会が拒否権をもつこと、(2)アイルランド政府はいぜんとして英政府が派遣するアイルランド総督の手中にあること、であった、(I-151) という見解もある。更に次章でみるように、社会主義者の Connolly はグラタン憲法に対してもっと厳しい見方をしている。とにかく、それは 1776 年のアメリカ独立にショックをうけた英政府が、アイルランドのプロテスタント支配層により多くの自治権を与える懐柔策だったのであろう。(F-xiv)

しかし、グリフィスはグラタン憲法を高く評価するのだ。1800年にアイルランド議会は解散する権利をもっていなかったから、英国との併合は違法だ。だから 1782 年のグラタン憲法は現在でも正当性をもっているとグリフィスは考える。このような考え方の背後には John Lock の『統治論』の思想があるらしい。「立法府は法律を作成することを他の者に委譲することはできない。なぜならばそれは国民から委任された権力だから。」<sup>(1)</sup>

ロック思想に無知な筆者には、この言葉の出典を確かめることはできないが、『統治論』中に類似の表現がみられることは確かである。ロックによれば「立法権は……すべての国家における最高の権力」(135)であり、「国民は至高の存在として行動する権利をもち、立法権を自分達の手のなかにもち続けるか、あるいは新しい統治の形態を樹立するか……自分たちがよいと思うところに

従って決定する権利をもつのである。」(243)<sup>(12)</sup>。

話が思わず進みすぎたが、グリフィスは「ハンガリー政策」を1904年1月から *United Irishman* 紙上に27週にわたって連載した。それはハンガリーの歴史とアイルランドの歴史を対比したものであった。そして最終回の記事において、300人からなるアイルランド国民議会の設立をグリフィスは訴えた。その国民議会で決定された諸政策は、英国統治下において設置されている地方議会などにおいて実行することが可能である。とすればアイルランドは英国王の下でも、一種の国内的な自治をおこなうことになる。そして英国王の存在はアイルランド国内の二つの相反する伝統——南アイルランドのカトリックと北アイルランドのプロテスタント——を和解させる機能をはたすであろう。(G-15, 16) グリフィスは本質的には、アイルランドは英国から分離・独立すべきだという分離主義者であるが、二重王政こそが北アイルランドのプロテスタントをダブリン設置の全アイルランド議会に参加させる、唯一の手段だと思っていた。(D-24)

その前年の1903年に、グリフィスは諸グループを合同して、様々な政治的見解を議論するための組織 *National Council* を結成して、会長となった。(G-18) そして、*Hungarian Policy* を *Sinn Fein Policy* と改称した。*Sinn Fein* (= ourselves) は *national self-reliance* を意味する標語としてつくられたものであった。(I-256) 前章でゲリック(ケルト)的な性格について言及したが、*Sinn Fein* (われらのみ) という標語にケルト民族は本質的にアングロ・サクソンよりも優れているのだ、という偏見(F-144)が潜んではいないだろうか。例えば、話はうんと飛んで第二次世界大戦中にアイルランドは「中立政策」をとることによって、それ以後は政治的にも、経済的にも(自力更生政策!), 文化的にも(検閲制度!), ヨーロッパ諸国よりもはるかに遅れた後進国になってしまうのだが、その「中立政策」にもなんとなく *Sinn Fein* (われらのみ) という唯我独尊的な響きを感じられてならないのである。

1905年11月の *National Council of Sinn Fein* の第一回年次総会において、おおよそ次のような決議文が採決された。(1)市民の義務と権利の認識を通じて、……国家の内部から発するあらゆる建設的な運動を支持することによって、民族的な自己を発展させること、(2)アイルランドの問題において、外国の権威や干渉を認めないこと、(3)すべての代表組織は、アイルランドの公務員、

商人、労働者のみを採用することを確実にすること、(4)地方の代表組織の能力を十分に利用することによって発展すること。(B-64)

そして、次のような演説をして、グリフィスはドイツの経済学者 Friedlich List の保護経済政策をアイルランドに適用すべきだ、と説いた。政治的独立には経済的な独立が必要だ、というのがグリフィスの持論であった。(I-254) だが、その演説は厳密すぎて、多くの保留条件つきなので、文章がやたらに長い。それで枝葉の部分を切り落として要点だけを引用したい。まず、国家とは何かを論じる。

Brushing aside the fallacies of Adam Smith and his tribe, List points out that between the individual and humanity stands, and must continue to stand, a great fact—the nation. The nation, with its special language and literature, with peculiar origin and history, with its special manners and customs, laws and institutions, ... combines itself into one independent whole, ... (中略)

#### 次に経済について

It is the task of national economics to accomplish the economical development of the nation and fit it for admission into the universal society of the future... (中略) そして、農業だけでなく製造業も発展させなければならないと説く。

An agricultural state is infinitely less powerful than an agricultural-manufacturing state....An agricultural-manufacturing nation is a man who has both arms of his own at his own disposal. (この辺は List のまる写しである。)

If an Irish manufacturer cannot produce an article as cheaply as an English or other foreigner, ...then it is the first duty of the Irish nation to accord protection to the Irish manufacturer. (リストは「関税制度は……諸国民がその存続および繁栄の保証または優越せる国力を得んとする努力の当然の結果である。」と言う。)

そして、議会の設立を訴えてグリフィスは演説を終えるのである。

We propose the formation of a Council of Three Hundred, ...and form a *de facto* Irish parliament. (イタリックは原文)<sup>(13)</sup>

「リストは、イギリスに立ち遅れたドイツ産業資本のイデオログであり、

ドイツで過激派として追放され、ヨーロッパ諸国を経てアメリカに亡命し、アメリカで後進国としての保護貿易論を形成したのであった。<sup>(14)</sup>

「正常的な国民は、共通の言語と文学とを有し、種々の資源に富み、広大にしてよく整った領土と大なる人口とを有している。農業・工業・商業および航海業は、ここでは均等な発達を遂げている。芸術や科学・教育施設や普通教育は、物質的生産と同じ高さに在る。憲法・法律および制度は、その所属民に高度の安全と自由とを与え、宗教心・倫理および幸福を促進する。」<sup>(15)</sup>とリストは書いている。グリフィスはこのような箇所に希望をつないだのであろう。だが、アイルランドは領土も人口も大きくない。リストによれば、領土が広大でなく、天然資源も乏しい国には保護貿易政策も有効ではないのだ。たとえば、「ベルギーは隣りのより大きな国民と同盟することによってのみ、領土および人口の狭小性に伴う、もろもろの欠陥を矯正することができる」<sup>(16)</sup>とされる。

だからリストによれば、英国のアイルランド征服は合理化されるのだ。「国土の領土的欠陥は、イングランドとスコットランドとの場合の如く相続によるか、……或は大ブリテンとアイルランドとの場合の如く征服によるか、そのいずれかによって矯正される。」<sup>(17)</sup>と。しかし、グリフィスはこのような都合の悪いところは無視していたのだ。

グリフィスにとっては、アイルランド人のnationality（国民性）は、人種、信条、領域にもとづくものではなくて、一つの共同体としての全アイルランド人という分解することのできない統一性にもとづくものであった。それはドイツのロマン派の Herder の国民性の概念を反映しているとも言われている。グリフィスは Herder 同様に、ナショナリズムをその国固有の歴史的・文化的現象とみなしていた。そして、その独自性において、ナショナリズムは他のいかなる民族主義の大義にも譲り渡すことのできないものであった。（G-42）また、グリフィスの国家論は個人よりも全体を重視するもので、国家の権利と個人の義務を強調するものであった。国家の権利とは自由を求めることであり、国家の構成員すべてに忠誠と奉仕を求める権利であった。それに対して個人の義務とは神を恐れ、国家に奉仕することだった。（F-120）だが、彼はまたプラグマティストでもあって、自然法とか人権論は拒否した。なぜならば、そのような理論は北アイルランドのプロテスタントにも独立権を与えることになるからだ。アイルランドは古代から英国とは別な国だったから、英国から分離する権利がある、とグリフィスは言った。<sup>(18)</sup>

1906年4月から *United Irishman* 紙は *Sinn Fein* と改称し、4ページの週刊の新聞として発足した。勿論、グリフィスが編集した。政党としての *Sinn Fein* の結成は1907年（8年説もあり）であった。彼は副議長になった。（D-27）

この頃のグリフィスは30代半ばになっても、まだ独身で母親と一緒に暮らしていた。新聞の編集から得る給料は僅かだったので、生活は貧しかった。（C-74）彼は一人で記事を書き、多くの委員会に出席し、講演をし、人々と面会し、手紙などを書いた。その他にも泳いだり、音楽会にも行った。（D-39, 40）彼は自分の記事に正確さを期すために、食費を切りつめても本を買ったり、仕事を終えた後にあちこちの図書館に通った。（A-6）そして夜の10時頃に図書館から出てくると、行きつけのパブで友人らと黒ビールを飲んで談笑し、パンとチーズを食べて家に帰るのだった。（C-81）だが、1904年頃には *Leinster Literary Society* の頃からの知り合いの女性 *Maud Sheen* と婚約し、1910年11月に39歳で結婚する。

#### 4. IRB や社会主義者との対立

*Sinn Fein* 党はもともと小さな組織だったが、グリフィスの「ハンガリー政策」の提唱で内部分裂がつづいた。また、アイルランド選出の議員に *abstention*（英下院のボイコット）を呼びかけても、まったくと言っていいほど反応はなかった。（D-32）*Sinn Fein* 紙の発行部数も1909年頃から衰え始めた。ピーク時で65000部弱だった。（G-45）ナショナリストの力は衰え、グリフィスのジャーナリストとしての影響力も衰えた。逆に、1910年の総選挙で、*Home Rule* 法案の実現をめざすアイルランド議会党は議席を伸ばし、IRBもアメリカ亡命から帰国した *Clarke* を中心に1907年に再建されて、力をつけ、1910年には機関紙 *Irish Freedom* が発行されるようになっていた。（G-75）ちなみに、この頃グリフィスはIRBを脱退したらしい。その理由はいろいろ言われているが、IRBの共和国樹立をめざすという誓言が、*Sinn Fein* の責任者（11年から議長となる）としてのグリフィスの独立性を妨げることになったからであろう。しかし、その後もIRBは決してグリフィスを見捨てはしなかった。彼の存在を認め、彼とともに仕事をし、後に新聞発行の資金を必要としていたグリフィスに資金援助をしたくらいであった。

(D-42)

IRB は名称のように英国王の存在を認めず、アイルランドの完全独立をめざす共和主義者の団体で、対英武装闘争も辞さないのだから、二重王政をめざす Sinn Fein との違いは明確だが、英国王の下で自治領をめざすアイルランド議会党の Home Rule 案と、グリフィスの二重王政との違いはどれ程のものであったのだろうか。議会党の指導者 Redmond は Home Rule 案について次のようにのべている。

What do I mean by Home Rule? I mean by Home Rule the restoration to Ireland of representative government, ... I mean that the internal affairs of Ireland shall be regulated by an Irish Parliament—that all Imperial affairs, and all that relates to the colonies, foreign states, and common interests of the Empire, shall continue to be regulated by the Imperial Parliament.<sup>(19)</sup>

これを読む限りでは Home Rule 案でも、アイルランド人は議会をもつのだし、当然のことながら英国王をいただくのだから、グリフィスの二重王政論とどこが違うのだろうか。オーストリア = ハンガリー二重帝国では、戦争、外交、財政に関しては双方の代表者が決めることになっていたが、英国の自治法案は英国が徴税権をもつものであったらしい。その点でグリフィスは自治法案に強く反対していた。(G-47)

1913年にダブリンで大ストライキがおこった。「その当時のダブリンの経済界は、英国からの輸入品と価格競争をするために安い労働力を必要としていた。また、アイルランドの労働者の多くが……給料は安く、そのくせ失業率は高く……団結して経営者側と闘う力などはとても弱かった。このような状況のダブリンへ1907年に31歳のLarkinが港湾労働組合の職員としてやって来たのだ。……当時のダブリンは……死亡率、トイレなどにおいて世界でも最悪のスラム街だった。」<sup>(20)</sup>

そのダブリン・ストライキに関して、グリフィスはJames Larkinをヒステリックなほど非難した。

Griffith frequently attacked Larkin, calling him a “strike organiser”, and “the representative of English trades-unionism in Ireland”. When the lock-out occurred in 1913, Griffith showed little sympathy for the workers. The food-ships from England he saw

as a dangerous bribe.<sup>(21)</sup>

また、ラーキンの働きかけが、アイルランド人の母国に対する義務をそらし、彼らを狭い階級利益の方へ導いていると言って、ラーキンに反対した。グリフィスにとっては、階級利益は国家のより大きな利益に従属すべきものであった。(G-101)

また、ラーキンに関しては、次のような悪意にみちた言葉も残している。

The consequences of Larkinism are workless fathers: mourning mothers, hungry children and broken homes. Not the Capitalist but the policy of Larkin has raised the price of food until the poorest in Dublin are in a state of semi-famine—the curses of women are being poured on this man's head.<sup>(22)</sup>

それに対して、IRBの指導者であり、復活祭蜂起の際に独立宣言を読んだ Padraic Pearse はダブリン・ストライキとラーキンに同情的だった。

I do not know whether the methods of Mr. James Larkin are wise methods or unwise methods...but this I know, that here is a most hideous wrong to be righted and the man who attempts honestly to right it is a good man and a brave man.<sup>(23)</sup>

そして、Pearse は初めて無視することのできない社会的な不正義に目覚めた。ピアスは社会主義者の Connolly とともに知的な議論をすることができた。コノリーの話はピアスに深い衝撃を与え、二人はナショナリズムと社会主義のどちらを先に実現すべきかなどを話しあった。<sup>(24)</sup>そしてピアスはコノリーの革命的社会主義に接近していった。(C-138)

しかし、グリフィスは頑迷だった。かつての Sinn Fein の同僚だった Hobson はグリフィスの独善性を激しく非難している。“his views were often narrow and reactionary; he was dogmatic to a very unusual degree. He did not easily tolerate any opinion which differed from his own, and this made it very difficult to work with him.”(G-87)

「グリフィスは鳩よりも鷹のような人で、静かで、控え目で……大多数の人には距離をおいていた。……批判する際には攻撃的で、情け容赦がなかった。」(I-248) とも、「あまりにも個人主義的で、理想的な組織人ではなかった。」(I-250) とも、言われている。de Valera や Collins のような、政治家としてのカリスマ性はなかったらしい。(D-84)

1912年には Pearse はグリフィスの性格に関して厳しい公開状を書いている。それは Hobson の見解に近いものであった。

You were too hard. You were too obstinate. You were too narrow-minded....You did not trust your friends enough....You overestimated your own opinion....You would follow no one's advice except your own....You would do nothing yourself, but if anyone else proposed something to be done you would prove that it was not feasible....Your friends were deserting you one by one and they would all desert you if you were to continue as you were. (G-88)

労働運動に対する姿勢も、*Sinn Fein* 紙と IRB の機関紙 *Irish Freedom* (1910年創刊) では、まるで違っていた。IRB は勿論、社会主義政党ではないから階級革命を否認するが、資本主義がイギリス製であるがゆえに、資本主義にも反対であった。<sup>(25)</sup> 例えば、1911年の鉄道ストライキでダブリンが食料不足になった時、グリフィスは英国の軍隊を使っても食料輸送を確保せよと言ったのに対して、*Irish Freedom* は「無条件降伏を擁護することによって、シン・フェイン紙はアイルランドの鉄道労働者の首のまわりに、英国の命令の鎖をしっかりと鋳で留めるための最も確実な方法をとっている」<sup>(26)</sup> と書いて *Sinn Fein* を非難した。

社会主義についても IRB は一定の理解を示している。

The main principle of that revolt known as Socialism comes to this finally:—that as the people produce the wealth and do not get it, the only remedy lies in the common ownership and democratic control of the land, the factories, the railways, and the other means of producing and distributing wealth. This principle and this solution gain ground everywhere today.<sup>(27)</sup>

そして Syndicalism (組合主義) がフランス革命時の社会主義で外国産だから不可とするグリフィスに対して、*Irish Freedom* は外国産の社会主義を資本主義に対する解毒剤として擁護するのだ。

If foreign Socialistic doctrines are being imported it is as the antidote to the poison of the Capitalist theory, which we also imported. The primary evil is the English occupation, which

includes more than the English soldiery, and the cleansing of Ireland from the foreigner will involve the abolition of his inhuman and degrading social system.<sup>(28)</sup>

これほど共和主義者の IRB と、ナショナリストの Sinn Fein とでは距離があったのである。さらに、グリフィスは帝国主義と社会主義をコスモポリタンの異教であると非難して、ナショナリズムを褒めたたえるのである。

Imperialism and Socialism—forms of the cosmopolitan heresy and in essence one—have offered man the material world. Nationalism has offered him a free soul. (G-43)

さらに「社会主義は哲学においても経済学においても誤っている」(C-101) と言って、“Sinn Fein and the Labour Question” と題して、グリフィスは次のように階級闘争の否定とその反対の協調主義を説いた。

I deny that Capital and Labour are in their nature antagonistic—I assert that they are essential and complementary to each other....It is the duty of the organized nation to protect Labour, and to secure for it the profits of production, not a mere competitive wage, but an adequate recompense proportionate to its service...Sinn Fein is a national, and not a sectional movement, and because it is national it must not, and cannot tolerate injustice and oppression within the nation. (C-110)

それに対して、社会主義者の Connolly は次のようにグリフィスの思想のブルジョワ性と反動性を批判するのだ。まず、グリフィスの称賛する「1782 年憲法は、政治的、経済的抑圧の権力を手つかずのままに残した」と言い、「アイルランド議会も人民とは無縁のもので、貧しいアイルランドの農民に対するアイルランド議会の法律は、残虐性と階級的な復讐心において胸をむかつかせるものであった。」それ故に「アイルランドの労働者は 1782 年の地位・状況を回復しようとする提案には、決して興奮することはないだろう」<sup>(29)</sup> と。

さらに、コノリーはグリフィスはハンガリーの実情を知らないのだと次のように言う。「ハンガリーは毎年アメリカに多数の移民を送り出している貧しい国であり、大多数の国民は選挙権も奪われている。労働者は貧しく悲惨で、慢性的に反乱直前の状態で、軍隊や警察が平和なデモ行進を抑圧するために雇われている。」<sup>(30)</sup>

コノリーは1910年アメリカから帰国する直前に「シン・フェイン党と社会主義者が民族の自主独立の原則を共通の基盤として、合体することの可能性を論じる論文を書いた」<sup>(31)</sup>ほど、シン・フェイン党に期待していたのだが、結果は無惨だった。ダブリン・ストライキの敗北後、コノリーは後に劇作家になる Sean O'Casey らとともに労働者を中心とした Irish Citizen Army をつくってゆく。

## 5. 復活祭蜂起前後

ダブリン・ストライキと前後して、Home Rule 法案の英議会通過が現実視されるにつれて、北アイルランドの英国との完全統合をめざす Unionist (プロテスタント) は必死になって反対し始めた。アイルランド全土が自治領になれば、英本土から切り離された彼らは一挙に少数派に転落してしまうからだ。それで彼らは Home Rule は Rome Rule (カトリック支配) だと言って、1912年には Ulster Solemn League and Convent という Home Rule に反対する誓約書がつくられ、約47万人が署名した。(その数字は北アイルランドの成人のプロテスタントがほとんどすべて署名したことを示している。)<sup>(32)</sup> 狂信的プロテスタントのオレンジ会が復活した。武力に訴えても Home Rule の実施を阻止するために、彼らは英国の保守党と結びつき、大量の武器を密輸して Carson (Oscar Wilde を裁いた男) を中心に Ulster Volunteer Forces を結成した。それで英政府は結局、北アイルランドを英領のままに残して、自治法案の適用区域から除外した。ということは、自治法案が通れば、アイルランドは南北二つの国に分割されることになる。それはナショナリストにとっては認めがたいことであった。グリフィスが二重王政を提示したのも、北アイルランドのプロテスタントを考慮してのことであった。

ところが、武器に訴えてでも英国政府の法律に反対するという、北アイルランド義勇軍の強い姿勢が、南アイルランドの共和主義者たちに反面教師の役割をはたした。南アイルランドでもただちに Irish Volunteer Forces が結成された。だが、それは1914年に第一次世界大戦が勃発すると分裂してしまい、大多数は英国に協力する National Volunteers になってしましたが、15000人ほどが反英派の Irish Volunteers として残り、その実権を IRB がにぎった。

組織が衰え、混乱してきた Sinn Fein のグリフィスも反英派の Irish Vol-

unteers に加入し、武器の密輸にも関与し、銃の訓練もうけた。(G-86)「アイルランド義勇軍」は三つの目標をかかげていた。(1)すべてのアイルランド人の権利と自由を確保し、維持すること、(2)そのための義勇軍の訓練と装備化、(3)これらの課題のために、信条と階級にかかわらず全アイルランド人を統一すること。(G-80) また、*Irish Volunteers* という名の機関紙が 14 年 2 月に発行された。

14 年 8 月に第一次世界大戦が始まると、イギリスのピンチはアイルランドのチャンスを含言葉とする IRB は開戦一ヵ月後の 9 月に会合をもち、戦争終了前に蜂起することを決めた。戦後の和平会談に代表団を送るためにも、また、英政府の徴兵制施行に反対するためにも、勝ち目はないがアイルランド人を覚醒させるための蜂起は 1915 年 9 月を予定していたが、ドイツからの武器援助が見込まれるようになったので、蜂起も 16 年 4 月まで延期された。その会合に社会主義者の Connolly が呼ばれていたことは確かだが、グリフィスも呼ばれていた。(G-86) だが恐らく彼は蜂起に反対したのであろう。それ以後二度とグリフィスは IRB の会合の席に呼ばれることはなかった。

新聞に対する英政府の検閲が始まり、14 年の 12 月初旬に *Sinn Fein* や IRB の機関紙 *Irish Freedom*、社会主義者 Larkin 派の機関紙 *Irish Worker* などが押収された。(G-147) それで *Sinn Fein* はただちに *Scissors and Paste* という紙名に変え、12 月中旬から翌 15 年 2 月下旬に禁止されるまで週に二回発行された。(G-49) 編集長は勿論グリフィスだが、資金は IRB から出た。そして 15 年 6 月から 16 年 4 月のイースター蜂起までは *Nationality* が同じくグリフィスを編集長として、IRB の資金で発行された。(G-150, 151)

1916 年 4 月の Easter Rising はグリフィスには知らされていなかったが、前日に知らされた *Irish Volunteers* の最高責任者の MacNeill (大学教授で祭り上げられていて、実権は IRB の Pearse らにあった) が激怒し、蜂起中止の命令を出した。蜂起反対派のグリフィスはその命令を各所に伝えてまわった、と言われている。(I-381) だが、蜂起は予定より一日遅れて決行された。

蜂起を知って、参加することが *Irish Volunteers* の一員の義務だと思い、グリフィスは拠点の GPO (中央郵便局) に駆けつけるが、ていよく追い払われた。(E-43) それで蜂起に反対した最高指揮官の MacNeill の家へ、今後の相談に自転車でいった。その時初めてグリフィスは恐怖を感じた。そこはすで

に警官隊によって包囲されているだろう。そこに近づけば蜂起の脱走兵として射殺されるかもしれない。そうなればアイルランド中の人が彼は逃亡者として殺されたと考えるにちがいないし、子供たちも父親の勇気を疑うかもしれない。そのことが一番恐ろしかった、と彼は後に妻に語っている。結局、グリフィスは MacNeill の家に入り、相談した。二人は逃亡することなく、逮捕されるまで自宅に留まることを決めた。(C-151) そして5月3日、Pearse らが処刑された日にグリフィスは逮捕された。(D-58)

蜂起の翌日、英政府は Irish Volunteers などの蜂起を、故意か無知か、Sinn Fein の蜂起と呼んだ。それで一躍 Sinn Fein は有名になってしまった。英政府としては蜂起の主体を Sinn Fein という、とるにたらない弱小組織とみなすことによって、その蜂起を軽んじる姿勢を見せるつもりであったらしい。(C-152) IRB という秘密結社のことはアイルランドの大衆はまるで知らなかった。<sup>(33)</sup>

だが、蜂起の際に読まれた「独立宣言書」の署名者7人のうち6人が IRB のメンバーであり、他の1人は社会主義者のコノリーであった。蜂起は明らかに IRB (アイルランド共和主義者同盟) によるものであった。独立宣言はカトリック的な色彩でまぶされているけれども、その基調はまぎれもなく、アメリカの独立宣言やフランス革命の自由、平等、博愛の精神をひく共和主義者のものであった。

We hereby proclaim the Irish Republic as a sovereign independent state, ...The republic guarantees religious and civil liberty, equal rights and equal opportunities to all its citizens, and declares its resolve to pursue the happiness and prosperity of the whole nation and of all its parts, ...<sup>(34)</sup>

これでは二重王政主義者のグリフィスに蜂起の声がかからなかったのも当然と言えよう。蜂起は一週間たらずで鎮圧され、IRB の中心的メンバーは処刑され、執行部は壊滅する。だが、指導者の処刑がすすむにつれて、アイルランド中の雰囲気が変わっていった。処刑者のミサに民衆が群がり、多くの団体が蜂起した者に同情する決議文をだし、民衆は蜂起をたたえる歌をうたい始め、蜂起指導者たちの写真が店のウィンドウに飾られ、後にアイルランドの国旗となる、緑、白、オレンジの Sinn Fein の三色旗が掲げられるようになった。<sup>(35)</sup> カトリック司祭系の新聞 *Catholic Bulletin* が英政府とアイルランド議

会党を批判して、反逆者を褒めたたえたことも、世論の動向に大きな影響を与えた。(G-157) Sinn Fein という名称は蔑称から、いつのまにか自己犠牲と英雄主義の象徴に変わっていった。<sup>(36)</sup> アイルランド中が、Sinn Fein の意味も実体もわからぬままに Sinn Fein に加入するようになっていった。<sup>(37)</sup>

## 6. シン・フェイン党の復活

——王ではなくて、常にハムレットであった男<sup>(38)</sup>——

これ以降のことは紙幅もないし、前回書いた『マイケル・コリンズ評伝』と重複することが多いので、要点だけをごく簡単にすませたい。

16年12月のクリスマス・イヴにグリフィスは釈放されて自宅に戻った。45歳になっていた。翌年2月には新聞 *Nationality* を復刊させた。(G-165) 17年2月に補欠選挙があり、蜂起の独立宣言書の署名者の一人で、処刑された Joseph Plunkett の父親プランケット伯爵が立候補した。伯爵は Sinn Fein などの既存の組織をつぶして、新しい Liberty League という政治組織をつくろうとして、シン・フェイン党と見解が対立した。結局、妥協が成立し、二つの組織が合併して、新 Sinn Fein となった。その支部は急速に増大していった。(I-390) だが、プランケットとグリフィスの争いの間に、すでに第三の男——de Valera が登場していた。彼は蜂起の指導者の一人で、最後まで戦ったことと獄中での指導力で急速に蜂起後の指導者として頭角をあらわしてきた。デ・ヴァレラは元数学教師で、威厳と権威があった。彼は共和主義者と穏健派の両方から支持を得て、7月の補欠選挙に圧勝し、不動の地位をきずいた。(G-170)

17年10月に開かれた Sinn Fein 党大会で、グリフィスに代わってデ・ヴァレラが議長に選ばれた。ついで Volunteers の議長にもデ・ヴァレラが選ばれた。復活し、改組した IRB の17年の憲章では、16年の蜂起で宣言された「共和国」の大統領には IRB の最高評議会議長が就任すると決められていた。(G-190) そのことも Griffith の議長辞任と de Valera の選出にいくらか関連があろう。新シン・フェイン党が英国の総選挙に勝てば、議長は「共和国」の大統領になるかもしれない。その「共和国」の大統領に、蜂起にも参加せず、IRB の脱退者でもあり、かつての二重王政主義者のグリフィスが選出される可能性は、蜂起に参加した共和主義者にとっては我慢のならないもので

あったにちがいないからだ。

共和主義者が主流を占めるようになった新シン・フェイン党の副議長に甘んじたグリフィスは、それ以後はいかなる局面においても、肩書はどうであれ、実質的なトップになることはなかった。いつも 20 歳ほど若い IRB の Michael Collins に引きまわされて、デ・ヴァレラと対立することになる。18 年 1 月の国民議会の創設においても、対英独立ゲリラ戦争においても、22 年 6 月から始まる内戦においても。その唯一の例外が 21 年から始まる対英条約の交渉団団長の仕事かもしれない。(その時 50 歳になり、すでに体力の衰えかけていたグリフィスは実質的な仕事はコリンズに委ねていたのだが。)

以下、年譜風にごく簡単にすませたい。

18 年の暮れの総選挙でシン・フェイン党は圧勝し、19 年 1 月に、公約どおりにシン・フェイン党は英国政府の支配下にありながら、英下院をボイコットしてダブリンに独自の国民議会議会を設立する。それは 1800 年の英国との併合以来じつに 120 年ぶりのアイルランド議会議会であり、グリフィスの長年の夢が実現した瞬間でもあった。だが、それは英国側からみれば不合法のものであり、英国支配に対する大きな挑戦であった。だから国民議会議会創設と同じ日に、IRB の主導する Volunteers (義勇軍) による警官射殺事件によって、対英独立ゲリラ戦争が始まるのも、決して偶然ではないのだ。

その国民議会議会政府の内相にグリフィスは選ばれる。しかし、6 月に首相のデ・ヴァレラが資金援助などを求めて渡米したので、グリフィス (47 歳) が首相代行となった。それ以降彼は政治に専念し、新聞発行などの仕事をやめた。(G-79)

21 年 7 月に独立戦争は休戦になり、10 月からロンドンで和平交渉が始まった。50 歳のグリフィスが交渉団の団長に選ばれた。それからほぼ二ヵ月交渉がつづき、最終的に英国から提示されたものは、Irish Free State (アイルランド自由国) という名前のカナダなみの Dominion (自治領) であった。グリフィスは 5 人の交渉団のなかで真先にそれを受諾した。「アイルランド自由国」は、共和国ではないが、彼の長年の夢である二重王政を実現させてくれるものであった。それは彼の先輩たちの O'Connell や Davis や Parnell らが望んでも得られぬものであった。「アイルランド自由国」は英帝国の一部だが、英政府はアイルランド議会議会の決定に拒否権を発揮することはできないし、アイルランドは財政 (徴税) 権をもち、英国製品にも関税を課すことができた。だ

から、その「自由国」を将来の完全独立のための第一歩とすべきだとグリフィスは考えた。条約には「忠誠の誓い」が含まれていたが、それは第一義的には新たに創設された「アイルランド自由国」への誓言であった。(G-194, 196)

北アイルランドに関しては、もし北アイルランドがダブリンの自由国議会に参加しなければ、南北アイルランドの国境が住民の願いに応じて再検討され、北アイルランドの領土は激減して、北アイルランドは経済的にも自立できないだろう、とグリフィスは考えていた。(D-192) だが、国境委員会は、条約調印3年後に一度開かれただけで、北アイルランドは出席を拒否して、以後二度と開かれることはなかったし、領土が小さいから経済的に自立できないというのは、Friedrich List の経済理論の影響かもしれないが、とにかく北アイルランドに関してはグリフィスは判断を誤ったようだ。

この条約調印がグリフィスが主体性を発揮した唯一の場面かもしれないが、皮肉にも彼の調印は大統領デ・ヴァレラなどの共和主義者の反発をまねき、アイルランドは真っ二つに割れ、内戦に突入することになる。22年1月の国民議会で対英条約は僅差で批准されたが、不満のデ・ヴァレラは大統領を辞任し、代わってグリフィスが「共和国」樹立を宣言している国民議会の大統領になり、「自由国」という自治領を準備するという矛盾した立場にたたされる。その「国民議会」は22年1月にグリフィスによって招集され、条約賛成派の議員のみ出席して、対英条約を批准し、Collins を議長とする暫定政府を任命して閉会し、以後二度と開かれることはなかった。<sup>(39)</sup>

条約にもとづいて4月1日からアイルランドに大蔵省が存在することになり、徴税などの財政上の自治権が確立された。<sup>(40)</sup> グリフィスの長年の夢がかなったことになる。51歳になっていた。以後アイルランドのすべての権力が暫定政府の手に入るようになった。

50歳をすぎたら政界を引退し、またジャーナリズムの仕事に戻りたい、とグリフィスは思っていた。特に、彼の妻が夫の政治活動を嫌っていた。(C-333) 対英独立戦争中は英軍の襲撃を恐れて彼は自宅に帰ることもできなかった。今でも面会人が多くて忙しく、戸外に出て好きな水泳をすとか、郊外の丘陵地帯を歩くなどはまったく不可能で、ストレスを発散することもできず彼は疲れはてていた。(C-359) それで引退を望むグリフィスは6月16日の自由国の初選挙に立候補しなかった。(D-148)

6月28日からデ・ヴァレラなどの条約反対派のIRA (アイルランド共和国

軍)と、自由国軍との間で内戦が始まった。英軍から借りてきた大砲で、条約反対派のIRAが立て籠もる建物に砲弾がうちこまれるのを、グリフィスは屋上から複雑な気持ちで眺めていた。(D-149)彼は不眠症におちいり、毎日夫人が数冊の小説を彼の執務室に運んできたが、その小説はすべて翌朝までには読まれていたという。政界から引退すると夫人に約束した8月が来てはまだ引退できなかった。(C-373)

友人のDr. Gogarty(かつてのJ. Joyceの友人で、その後ジョイスと仲たがいがいた。今は医者となり、文学者としてもそこそこの名声を博していた。Ulysses冒頭のマーテロ塔の場面に出てくるBuck Mulliganのモデルとみなされている男)が診察にやって来て、グリフィスは即座に入院させられた。7月31日に急性気管支炎になったが、手術の必要はなかった。8月12日、親戚の見舞い客を見送りに階段の所まで来て、そこで急に靴紐でも結びなおすかのようにくずれ落ちた。脳溢血(くも膜下出血)でほとんど即死だった。(C-37)国民議会(共和国)政府の大統領兼首相という、ほとんど実体のない肩書で盛大な国葬が行なわれた。それから10日たらずして、若き僚友Michael Collinsも暗殺された。

長年の粗衣粗食の貧乏暮らしと、獄中暮らし(グリフィスはイースター蜂起直後、18年の徴兵制反対運動、20年末の対英独立戦争中と3回投獄されている)、それに加えて19年1月の国民議会創設(独立戦争の開始)以来3年半におよぶ政治的な争いやその後の内戦などの、緊張、失望、ストレスなどで、肉体的にも精神的にも消耗しきって死んだのであろう。(cf. I-466)

## 7. おわりに

グリフィスが政治家として一流であったかどうかは、筆者にも分からないが、次のような評価には共感をおぼえる。

A patriot rather than a politician, a democrat rather than a demagogue, he aspired to no dizzy heights of leadership, though by the power of his intellect and the splendour of his genius, leadership was thrust upon him. (B-76)

グリフィスが愛国者であったことは確かであらうし、その能力ゆえにみずから望んだわけでもないのに、周囲から指導権を押しつけられ、指導性を求められ

た、というのも確かであるように思えるからである。

ナショナリストとしてのグリフィスの評価は高い。「グリフィスは青年アイランド党の Davis や Mitchel 以来のもっとも偉大な人間であり、Wolfe Tone 以来のもっとも才能のある万能型のナショナリストであった。」<sup>(41)</sup>

だが、ジャーナリストとしての評価は一層高いようだ。「彼のペンは Mitchel 以来のもっとも建設的であると同時に破壊的なペンであった。」<sup>(42)</sup> とか「英国のダブリン政府はグリフィスを、1800年の併合以来の最強の仇敵であると公言していた。」(A-17) とか言われている。Mitchel のことをまるで知らない筆者には判断がつかかねるが、グリフィスがジャーナリストとして有能で、精力的であったことは確かであろう。

#### 参考文献

Arthur Griffith の生涯などは、主として下記の文献によった。

- (A) *Memorial of Arthur Griffith and Michael Collins* (Martin Lester, LTD., Dublin, 1923)
- (B) Geo. A. Lyons, *Some Recollections of Griffith & His Time* (The Talbot Press, LTD., Dublin, 1923)
- (C) Padraic Colum, *Arthur Griffith* (Browne and Nolan LTD., Dublin, 1959)
- (D) Calton Younger, *Arthur Griffith* (Gill and Macmillan, 1981)
- (E) Calton Younger, *A State of Disunion* (Frederick Muler, LTD., G.B. 1972)
- (F) Richard P. Davis, *Arthur Griffith and Non-Violent Sinn Fein* (Anvil Books, Dublin, 1974)
- (G) Virginia E. Glandon, *Arthur Griffith and the Advanced-Nationalist Press Ireland, 1900-1922* (Peter Lang, New York, 1985)
- (H) Robert Kee, *The Bold Fenian Men (The Green Flag Vol.II)* (Quartet Books, London, 1976)
- (I) F. S. L. Lyons, *Ireland Since The Famine* (fontana, 1973)

なお、本文中の( )内の記号 A, B, Cなどは、上記の文献に対応する。例えば、(A-10)は、上記文献(A)の10ページを示す。

#### 《注》

- (1) Sean Cronin, *Irish Nationalism* (Pluto Press, G.B., 1983) p.73
- (2) *Jonathan Swift, The Drapier's Letters* (Basil Blackwell, Oxford, 1966) p.62
- (3) *Ibid.*, p.63
- (4) Gretchen M. MacMillan, *State, Society and Authority in Ireland* (Gill and Macmillan, 1993) p.125
- (5) *Ibid.*, p.125

- (6) 高田久寿『炎の美女革命家 モード・ゴン』(誠文堂新光社 1983) p.81
- (7) J. Dunsmore Clarkson, *Labour and Nationalism in Ireland* (Ams Press, New York, 1970) p.256
- (8) John Newsinger, *Fenianism in Mid-Victorian Britain* (Pluto Press, 1994) p.54
- (9) ムーディ, マーチン編著(堀越智監訳)『アイルランドの風土と歴史』(論争社) p.311
- (10) 高田, 同書 p.148
- (11) *State, Society and Authority in Ireland*, p.132
- (12) 「世界の名著」(27)「ロック, ヒューム」大槻春彦責任編集(中央公論社)
- (13) Curtis and McDowell eds., *Irish Historical Documents 1172-1922* (Methuen, London, 1943) pp.313-315
- (14) 小林 昇『経済学史研究序説』(未来社) p.193 他
- (15) フリードリッヒ・リスト(正木一夫訳)『政治経済学の国民的体系』(勤草書房) p.252
- (16) 同書, p.254
- (17) 同書, p.253
- (18) *State, Society and Authority in Ireland*, p.131
- (19) Grenfell Morton, *Home Rule and the Irish Question* (Longman, London, 1980) pp.87-8
- (20) 拙稿「なぜジェイムズ・コノリーは蜂起したのか」(法政大学教養部紀要, 1994) p.16
- (21) *Divided City portrait of Dublin 1913* (curriculum development unit Dublin) p.99
- (22) *Ibid.*, p.70
- (23) *Ibid.*, p.100
- (24) Ruth Dudley Edwards, *Patrick Pearse* (Faber and Faber, London, 1977) p.182, 184
- (25) *Labour and Nationalism in Ireland* pp.162-163
- (26) *Ibid.*, p.282
- (27) *Ibid.*, p.284
- (28) *Ibid.*, p.287
- (29) *Sinn Fein & Socialism* by James Connolly, "Chales Russell", Selma Sigerson (The Cork Workers's Club, Ireland) p.10 *The Harp* (1908年4月)より転載
- (30) *Ibid.*, p.11
- (31) 「なぜジェイムズ・コノリーは蜂起したのか」 p.16
- (32) *Home Rule and the Irish Question*, pp.107-108
- (33) P. S. O'Hegarty, *The Victory of Sinn Fein* (The Talbot Press Ltd., Dublin, 1924) p.7
- (34) *Irish Historical Documents*, p.317
- (35) Joseph M. Curran, *The Birth of the Irish Free State 1921-1923* (The University of Alabama Press, U.S.A., 1980) p.13
- (36) P. S. Beaslai, *Michael Collins and the Making of a New Ireland*

- (Kraus Reprint, Millwood, New York, 1983) vol.I, p.125
- (37) *The Victory of Sinn Fein*, p.8
  - (38) *Some Recollections of Griffith & His Time*, p.74
  - (39) Eoin Neeson, *The Civil War 1922–23* (Poolbeg, Dublin, 1989) pp.88–89
  - (40) *Ibid.*, p.252
  - (41) *The Victory of Sinn Fein*, p.127
  - (42) *Ibid.*, p.139